



お別れ

1泊2日の体験が終わり、別れの時です。離村式が行われる田代営農センター駐車場では、あちらこちらで民泊先の家族やインストラクターと生徒が別れを惜しむ場面が見られました。

実質1日という短い時間の中で、受け入れ家族やインストラクターと奈良中学校の修学旅行生の関係はぐっと近いものになりました。

「民泊と体験を終えた子どもたちの表情を見てください。まったく違った表情になっていますから」。対面式での田代地区グリーン・ツーリズム研究会会長岩木保徳さんの言葉どおり、体験を終えた生徒たちの表情は生き生きとし、活力に満ちていました。そこには、自分たちだけで見ず知らずの人と心が通じ合い信頼関係を築けたことへの大きな自信と深い感動がありました。

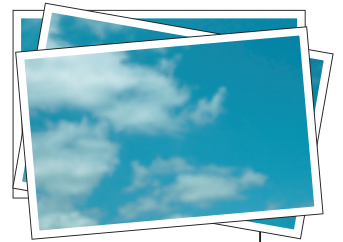
そして、松浦にもう一つの家族、もう一つのふるさとができたことへの喜びも見えました。

インストラクターや民泊受け入れ家族も、家族が増えたことの喜びを胸に、「またいつでも遊びにおいでね」「待つとるよ」と生徒たちに声を掛けていました。

それぞれ忘れられない思い出を胸に、生徒たちは帰路につき、インストラクターや受け入れ家族の人たちは、生徒たちを乗せたバスが見えなくなるまで手を振っていました。



未来へとつながる体験型旅行



体験型旅行は、実際に体験した2、3日で終わりではありません。松浦でできた家族との交流がこの先ずっと続いていき、同じ学校が再び訪れたり、体験した生徒が再び松浦を訪れたりするなど未来へとつながる可能性を秘めているのです。

その後の交流

松浦市での体験を終えて帰った生徒たちから、民泊先やインスタラクターあてに度々手紙が送られてきます。生徒の家族の手紙には「日常会話も少なくなっていた子どもから明るく話しかけてくれるようになった」と書いてあるなど、親子の会話が增えたと聞くことも少なくありません。

また、卒業後に再び民泊先を訪れる子どもたちもいます。手紙や電話のやりとりから交流が進み、互いにまた会いたいという気持ちが増えるからでしょうか。

子どもたちが「ただいま」と言つて玄関を入ってくる姿を見ることも、受け入れた家族が体験型旅行の受け

入れをして良かったと実感するときなのかもしれません。

誇りと喜び

民泊受け入れやインスタラクターをしている人は、



NPO法人
体験観光ネットワーク松浦党
理事長 **松永功**さん
(鷹島・阿翁、68)

体験型旅行にかかわること
で、自分たちが子どもたちの育成に一役かかっていると
いう喜びを持ち、地域の魅力
を再確認すると同時に、
地域の発展に貢献している
という誇りを持つことができると言います。

「体験型旅行は、私にとつて生きがいです。いつまでも続けていきたい。私たちが地域を元気にしていくんです」と言つた、民泊受け入れとインスタラクターをしている女性の顔は生き生きと輝いていました。

素朴で文化的な観光地を目指します

おかげ様で本年度は約1万5千人の体験者を受け入れます。しかし、その多くが修学旅行生で5、6月に集中しており、受け入れ地区に過度の負担がかかっています。受け入れ数を増やしていくには、他の時期に一般団体や個人も受け入れ、1年を通じて集客する努力が必要です。そうすることで受け入れ者の所得増加につながり、地域の活力も増すことでしょう。

本事業の充実には、本団体も高度な判断を迅速に実行に移せる組織へと変革せざるを得ません。本地域も湯布院のような素朴で文化的な観光地を目指したいですね。

〇問合せ

松浦体験型旅行協議会
NPO法人体験観光ネットワーク松浦党

☎0956-27-9333